



世界史 16 資料 創世記 2

第六章 [神々の子と人間の娘]

さて、人間が地上にどんどん殖え始め、娘たちが生まれるようになったときのことである。ヤーウェは、人間が地上でますます悪いことを行い、心の中でいつも悪いことばかり考えているのを見た。そこでヤーウェは地上に人間を造ったことを後悔し、心を痛めた。しかし、ノアだけはヤーウェの心になんておろそかになっておらず、恵みを与えられることになった。

ノアには三人の息子、セム、ハム、ヤフェトが生まれた。そこで神はノアに言った。

「私は、すべて生きとし生けるものに終わりを来たさせる。彼らの不法が世界中に満ちているからだ。今から、私は彼らを世界もろとも滅ぼす。おまえは、ゴフェルの木材で箱舟を造れ。箱舟には、小部屋をいくつも造り、内側も外側もタールを塗れ。わたしは今から地上に洪水を起こし、息をして生きているもの、生きとし生けるものをすべて、天の下から滅ぼす。地上のすべてのものは絶滅するであろう。ただし、わたしはおまえと契約を結ぶことにする。おまえは妻子や嫁たちと共に、箱舟に入れ。また、すべての生き物、すべて生きとし生けるものの中から、二つずつを箱舟に連れて入り、おまえと共に生き残れるようにせよ」(l)

ノアはそのとおりにした。すべて神が命じたとおりに実行したのである。

第十一章 [バベルの塔]

昔、世界中の人々はみな同じ言葉、同じ言語を使っていた。

あるとき、東の方へ旅をしていると、バビロニア地方に平野が見つかったので、そこに住むことにした。彼らは互いに「さあ、粘土をこねて、煉瓦を焼こう」と言って、石材の代わりに煉瓦を、漆喰の代わりにアスファルトを用意した。彼らはまた言った。「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」

さて、ヤーウェは下の方へ降りて行きながら人間たちが建設した塔のある町を見た。そこでヤーウェは言った。

「ああ、彼らはみな同じ民で、同じ言葉を使い、こんなことをし始めてしまった。このままにしておけば、どのような彼らの企ても、押しとどめることが出来なくなるにちがいない。さあ、下の方へ降りて行き、そこで彼らの言葉を混乱させ、互いに言葉が通じなくなるようにしてしまおう」(m)

こうして、ヤーウェはそこから彼らを世界中に分散させてしまったので、彼らは町の建設をやめた。

第十二章 [アブラムの旅]

ヤーウェはアブラムに言った。

「さあ、おまえはおまえの故郷、親族、父の家を離れて、わたしが示す土地へ行きなさい」

アブラムは妻のサライ、甥のロトを連れ、ハランで得た全財産と奴隷とを携えて、カナン地方に入った。ヤーウェは、アブラムに現れて言った。「この土地を、おまえの子孫に与えよう」アブラムは自分に現れたヤーウェのために、そこに祭壇を建設した。

第十六章 [ハガルの逃亡と出産]

アブラムの妻サライには、子供が生まれなかった。さて、彼女には、エジプト人の女奴隷がいて、ハガルという名前だった。---彼女は(アブラムの子を)身ごもった。そこでサライは彼女をいじめたので、彼女はサライのもとから逃げ去った。ところが、ヤーウェの御使いが、荒野の泉のほとり、シュル街道にある例の泉のほとりで、彼女を見つけ、尋ねた。

「サライの女奴隷ハガルよ。女主人のもとに帰り、従順に仕えなさい。おまえの子孫を数え切れないほど多く殖やして上げよう。今、おまえは身ごもっている。やがて、男の子を産む。その子にイシュマエル(神はお聞きになる)という名前を付けなさい。ヤーウェがおまえの苦しみをお聞きになられたからだ」(n)

第十七章[契約]

アブラムが九十九歳になったとき、ヤーウェはアブラムに現れて、こう語りかけた。

「わたしは、エル・シャッドイ(全能の神)である。おまえは責められるところのないように、わたしに従って人生を

歩みなさい。そうすれば、わたしはおまえとのあいだに契約を結び、おまえの子孫を数多く殖やすであろう」

「さあ、わたしがおまえと結ぶ契約はこれだ。おまえは多くの国民の父となる。これからは、おまえはアブラムという名前ではなく、アブラハムという名前で呼ばれるようになる。わたしがおまえを多くの国民の父(アブ・ハモン・ゴイーム)とするからだ。わたしはおまえの子孫を数多く生まれさせ、諸国民の父とする。王になる者たちも、おまえから出るであろう。わたしは契約をおまえとのあいだに、またおまえに続く世代の子孫とのあいだに永遠の契約として立て、おまえのために、またおまえに続く子孫のために神となろう。わたしはおまえが滞在しているこのカナンの土地をすべて、おまえとおまえに続く子孫に永遠の所有地として与え、彼らのために神となろうだから、おまえの方でも、わたしの契約を守りなさい。おまえも、おまえに続く世代の子孫もだ」(o)

さらに神はアブラハムに言った。

「おまえの妻サライのことだが、これからはサライという名前ではなく、サラ(女王)という名前で呼ぶことにしなさい。わたしは彼女を祝福し、彼女によっておまえに男の子を与えよう。わたしは彼女を祝福し、諸国民の母とする。諸民族の王になる者たちも、彼女から出るであろう」

アブラハムはひれ伏した。だが、彼は笑った(イサク)。というのは、「百歳にもなろうという男に、どうして子供が生まれるだろうか。サラにしても、九十歳になるところなのに、どうして子供が産めるだろうか」と、ひそかに思ったからである。すると、神は言った。

「いや、おまえの妻のサラが、おまえのために男の子を産むのだ。おまえはその子にイサク(彼は笑う)という名前を付けなさい。わたしは彼と契約を立て、それを彼に続く子孫のために永遠の契約とする」

第二十一章 [イサクの誕生]

ヤーウェは前に語ったとおり、彼女は身ごもり、年老いたアブラハムのために男の子を産んだ。アブラハムは、サラが自分のために産んだその男の子に、イサク(=彼は笑う)という名前を付けた。(p)

第二十二章 [イサクをささげる]

これらのことがあった後、神はアブラハムを試練に会わせた。神はアブラハムに呼びかけた。

「アブラハムよ、おまえの息子、おまえが愛しているひとり子、イサクを連れて、モリヤ地方へ行きなさい。そしてそこの、わたしが指定する山の上で、焼き尽くす献げ物として彼をささげなさい」。

アブラハムは次の朝早く起きて、ろばに鞍を置き、二人の若者と息子イサクを連れて出かけることにした。

やがて、神に指定された場所に着くと、アブラハムはそこに祭壇を築き、薪を並べた。それから、息子のイサクを縛って、祭壇の薪(たきぎ)の上に載せた。そしてアブラハムは、手を伸ばして刃物を取り、息子を献げ物として殺そうとした。

するとそのとき、ヤーウェの御使いが天から呼びかけた。「アブラハム、アブラハム、その子に手をくだすな。何もしてはならない。おまえが神を恐れる者であることが、今よく分かった。おまえが自分の息子、おまえのひとり子をわたしにささげることさえ拒まなかったからである」

ヤーウェの御使いは、ふたたび言った。「ヤーウェの御言葉を伝えます。『わたしはみずからにかけて誓う。おまえはさきほど実行しようとしたように、自分の息子、おまえのひとり子をわたしにささげることさえ拒まなかったのだから、おまえを豊かに祝福し、おまえの子孫を天の星のように、海辺の砂のように数多く殖やすことにする。おまえの子孫は敵の町々を占領するであろう。また、地上の諸国民はすべて、おまえの子孫をとおして祝福を受けることになるであろう。おまえがわたしの言葉に聞き従ったからである』(q)」